

令和8年度 調布市立調和小学校 学校経営計画（学校長 安藤 力也）

学校の教育目標		
<b>豊かな心のハーモニーを奏でる学校</b> ○心もからだも健康な子(心とからだのハーモニー) ○よく考え 学びあう子(学びのハーモニー) ◎力をあわせてやりぬく子(協力・協働のハーモニー)		
<b>目指す学校像(ビジョン) 例) 学校像、教員像、児童・生徒像</b>		
【目指す学校像】 『『調和の心』を育み、笑顔あふれる学校』 【目指す教師像】 (1) 「よさを大切に」～find the good～ 学校として、教師として、人間として、子どもたちの「よさ」を認め、引き出し、さらに伸ばしていくことを第一に考えていく。教職員も子どもたちも、「よさ」を生かし、笑顔で互いに高め合っていく。 (2) 「Team 調和」～one for all, all for one～ 一人一人の「よさ」を生かし、その力が結集すれば、より大きな力となる。子どもたちの未来に触れている」という、その「責任と誇り」を胸に、「Team 調和」の一員として、学校・地域・保護者が力を合わせて笑顔 とともに教育活動を進めていく。 (3) 「すべては子どもたちの笑顔のために」～all for smile of children～ “子どもたちが「心身ともに健康で幸せな感情が持続的である」ことは、私たちの共通の願いである。子どもたちを受け止め、寄り添い、自身の指導を常に振り返るとともに、かけがえのない我が子を思う保護者の気持ちに寄り添って、最善の努力をしていく。 【目指す児童像】 自他尊重: 『Respect for oneself and others』 ◇「自分のよさに気づき、自分を大切にする」 ◇「他者のよさを認め、大切に思う」		
ビジョンの 設定理由	私たち教職員は、「子どもたちの未来に触れている」という、その「責任と誇り」を胸に、子どもたち一人一人と向き合い、受けとめ、寄り添い、心をつなげて子どもたちの笑顔のために精一杯力を尽くさなければならない。子どもたちが自分の「よさ」に気づき、自己肯定感を高めるとともに、他者を尊重しながら未来を拓く「生きる力」を育てるために、私たち教職員も子どもと共に学び続けていく。そして、学校、保護者・地域住民などが相互に連携、協力しながら、笑顔とともに教育活動を推進していく。	
中期的な経営目標		
①協力・協働のハーモニー : 「人間関係形成力」の育成 : 自分を大切にし、他者や多様な価値観を認め合える児童の育成 ②学びのハーモニー : 「問題解決力」・「探究的な活動」ができる資質・能力の育成 : 主体的・対話的で深い学びの視点に立ち、児童が主体となる授業づくりを目指した授業改善 ③心と体のハーモニー: 「実践力」の育成 : 自己の体力に関心をもち、自ら健康な生活を送ることができる児童の育成 ④児童一人一人に応じたより良い指導・支援のための特別支援教育の推進 ⑤安心・安全な学校づくりの推進 ⑥地域とともに歩む学校 : 学校運営協議会や地域学校協働本部を核とした地域連携の一層の推進。		
調布市立学校における共通した領域 <短期的な経営目標>		
① 豊かな心(徳)	② 確かな学力(知)	③ 健やかな体(体)
(1) 取組目標(具体的方策)	(1) 取組目標(具体的方策)	(1) 取組目標(具体的方策)
①学校経営方針の柱として「調和の心の育成」=「自他尊重の精神の涵養」を位置付け、校長自ら全教育活動を通じて、自分や他者を大切にすることに関連して、教員、地域・保護者、児童に発信することで一層の涵養を目指す。 ②人権教育を基調とし、生命尊重の精神を培うとともに、開校以来受け継がれている「調和の心」、具体的には、「全ての児童・全教職員が自他の存在を認め、互いを大切にしようとする自他尊重の精神の涵養」を目指し、「徳・知・体の調和のとれた発育・発達」が具現化できるように指導を重ねていく。 ③児童の主体性を育む活動を通して他者とかかわりあう中で、自己肯定感、自己有用感を得たり、喜びを感じたり、互いの心が通じ合う心地よさを味わうことができるよう、意図的・計画的な活動を展開する。 ④異学年交流の充実を図るために「たてわり班」での活動を年間通して実施する。異なる個性をもつ児童同士の多様な関わりを経験できる環境を整え、児童の人間関係の幅を広げるとともに、多様性や変化に柔軟に対応する力及び良好な人間関係を築く力の育成を図る。	①主体的・対話的で深い学びとなるための学習を展開する。また、主体的に学ぶ児童の姿とはどのような姿を指すのか、教職員が共通理解するとともに、協働的な学習で多様な考えをもとに解決を図ることのできる力を児童に身に付けさせる。 ②児童一人1台タブレット端末をはじめとするICT機器を効果的に活用した授業を積極的に行い、児童の思考力・表現力、情報活用能力、メディアリテラシーを育む授業の推進を図る。 ③校内研究では「正しく伝える『書く力』」を追求する児童の育成～児童が主体の授業づくりを通して～を研究主題に据え、国語科の指導方法の基礎・基本とともに、児童が主体となって学ぶ授業づくりに向けた授業改善を目指す。 ④全ての学年での教科担任制や教科交換授業の実施、校内研究や年次研修における実践的指導力の向上、個々の児童に適した学習指導方法の導入等を意図的・計画的に実施をする。	①体力テストの結果から児童の体力の現状を踏まえた体育科における授業力向上を目指す。日々の体育授業や体育的活動の充実を図ると共に、児童の運動の日常化を目指した取組の充実を図り、体力向上を目指す。 ②「長縄跳び」をスポーツフェスティバル競技として全校で年間を通して実施する。また、「ちょこプラ1」の取組を一層充実させ、児童が体を動かすことの楽しさを味わえる計画を実施する。 ③学校2020レガシーを継承するとともに、外部人材の活用を通して、基礎的な運動能力の向上と運動することで味わうことのできる楽しさや喜びを経験させられるよう計画・実施する。
(2) 成果目標(数値目標)	(2) 成果目標(数値目標)	(2) 成果目標(数値目標)
①自己評価アンケート項目「豊かな心の育成」「学校行事」「あいさつ励行」「規範意識」に関する項目における肯定的回答90%以上を目指す。 ②異学年交流(たてわり班活動)では年間6回のたてわり班給食会、3学期たてわり班給食に	①自己評価アンケート項目「学習理解」「学習意欲」「主体的な学び」に関する項目における肯定的回答90%以上を目指す。 ②全国学力・学習状況調査における正答率は都平均正答率を上回ることを目指す。	①自己評価アンケート項目「体力向上」に関する項目における肯定的回答90%以上を目指す。 ②「ちょこプラ1」として取り組める動きを学年ごとに決めて毎日行う。また、長縄跳びは、スポーツ

え、児童集会や学校行事においてたてわり班活動を効果的に活用した取組を実施する。		エスティバル及び年間3回の集会活動に位置付けるとともに、朝学習の時間や体育授業の中でも適宜実施する。これらの取組を通して身体活動量増進及び運動の日常化による体力向上につなげる。
<b>学校の特色を生かした領域 &lt;短期的な経営目標&gt;</b>		
<b>④ 特別支援教育の充実</b>	<b>⑤ 安心・安全な学校づくりの推進</b>	<b>⑥ 地域とともに歩む学校</b>
(1) 取組目標(具体的方策)	(1) 取組目標(具体的方策)	(1) 取組目標(具体的方策)
①いじめや不登校などに適切かつ迅速に対応できるように教員一人一人の教育相談機能や生活指導部を中心とした指導体制の充実に努める。また、いじめ対策委員会、不登校対策委員会、特別支援校内委員会等を中心に相談機関の活用や連携を図り、児童や家庭個々の状況に応じた支援体制を築き、支援を行う。	①全教育活動を通じて児童の道徳性を養うとともに、いじめの撲滅のため、いじめ対策委員会を随時開催し、未然防止と解決に努める。また、調布警察署や調布警察スクールサポーターと連携し情報収集を行い、問題行動の未然防止の取組を行う。	①学校と家庭や地域社会との連携をさらに深め、学校周辺の環境を活用した地域学習、地域の人材を生かした学習活動等、地域社会の方々や文化に触れる機会を通して、地域の一員としての自覚を促すとともに、相互の連携を深める交流事業を通して、さらに開かれた学校づくりを目指す。
②特別支援教育の充実に図るために、特別支援教育コーディネーターの複数指名、特別支援教育の専門性が高い教員を中心とした校内会議やOJTを行い、連携型個別指導計画の作成をはじめ、教員の特別支援教育に関する理解を深め、指導力向上を図る。	②全職員が学校生活及び施設設備における安全確保と危険回避に向けた改善意識を常に高くもち、役割分担を明確にしながら児童の安全を守る。休み時間等教員が児童と共に遊びに参加し、児童の安全確保に努める。	②コミュニティスクール制度導入2年目となる。地域・保護者から信頼される学校となるよう、教職員と地域・保護者との連携の一層の充実に努める。地域協働本部との連携を充実してこことで、地域を教材とした学習(生活科・総合的な学習の時間:キャリア教育、野川探索、地域探索等)を実施する。
③通級指導教室を終了した児童が在籍学級で指導の成果を確かめ、より円滑に学校生活を送ることができるようにするための支援として、児童・保護者のための「ホーム・カミング・デイ」の取組の充実に努める。	③食物アレルギー等個々の特性に応じた、安全で確実な給食や調理実習等を実施していく。同時に食物アレルギー反応に対する危機管理できる体制づくりと研修の充実により人材の育成を図る。	③全校一斉保護者会の実施や授業公開。個人面談等だけでなく、日々、保護者と連携を図ることができるよう、情報の発信に努める。また、ちょうわ地区協議会や健全育成推進調和地区委員会との連携や地域協働本部を中心とした学習活動の展開を図る。
(2) 成果目標(数値目標)	(2) 成果目標(数値目標)	(2) 成果目標(数値目標)
①自己評価アンケート項目「一人一人を大切にしたい学校づくり」における肯定的回答90%以上を目指す。	①自己評価アンケート項目「学校生活」「学校安全」における肯定的回答90%以上を目指す。	①自己評価アンケート項目「地域連携」「情報発信」における肯定的回答90%以上を目指す。
②通級指導教室拠点校のよさを生かし、特別支援教育の専門性が高い教員を中心とした校内会議やOJTを実施するとともに、連携型個別指導計画の作成、特別支援教育理解・啓発授業を全学級にて実施する。	②アレルギー対応研修会を年に2回以上実施し、「子どもの数は命の数」を常に自覚し、給食を通して啓発を行い、食物アレルギー事故ゼロを継続する。	②学校運営協議会を年8回開催し、学校運営について意見を求めるとともに、教職員との意見交換・熟議の機会を一層充実させることで学校と地域がともに歩む学校づくりの一層の推進を図る。
③校内委員会を月1回開催し、特別支援教育コーディネーターが中心となって外部機関と連携した支援の在り方について検討し、改善策を提示する。巡回心理士、SCとは巡回及び勤務日毎に指導や支援のために有用となるフィードバックを受け、指導・支援に生かす。	③いじめ対策委員会や「友だちアンケート」及び「心の天気予報」を毎月1回実施し、児童の実態を丁寧につかみ、きめ細やかな指導・支援やいじめ等の未然防止や早期発見・解決に向けた組織的対応に生かす。	③学校ホームページは随時更新することで、リアルタイムに教育活動の様子を伝えていくようにする。学校安全・安心情報配信システム「すぐーる」や学校ホームページを活用し、適時性をもった情報発信を行う。

<b>人材育成・組織運営</b>
<p>主幹教諭・主任教諭を中心に日常的・意図的なOJTをそれぞれ推進しながら、職員相互に研鑽を図る。主任教諭には、学校運営にかかわる明確な役割を示し、組織貢献意欲を高めるとともに達成感を味わうことで、人材育成を図る。また、子どもたちの成長を願いながら、多様な課題、価値観、対応に対しては、一人で抱え込まず、組織的に対応していく。職員一人一人の「よさ」を生かしてそれぞれの役割を果たしながら、その力が結集させて「学校力」を高め、「Team 調和」として全教職員一丸となり教育活動を進めていく。</p>
<p>(1) 人材育成</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○年間3回の授業観察では、授業者が作成した指導案を共有し、相互に授業参観を実施する機会とすることで、授業力向上につなげる。</li> <li>○校内研究と関連付けたOJTとして「学び合いグループ」を形成し、本校初任校の教員と主任教諭が年間を通して主体的な研鑽機会を作る。</li> <li>○Teamsのチャット機能を活用し、効率的に確認や情報共有を図る。</li> </ul> <p>(2) 組織運営</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○自己申告の活用 教員個々の夢・希望を達成させ、本人が輝くことこそが次世代の教員養成につながると考え、自己申告(3回/年)を活用し、自己のライフプランを見据えた組織における分掌を担当させる。また、子育て世代が多くいることから、心身ともに健康を維持することで、ゆとりをもって勤務にあたることができるようにするために、ライフ・ワーク・バランスに十分配慮した職場環境を作る。</li> <li>○若手教員には経験年数や強みに応じた役割や新規採用教員への指導・助言の機会を設定し、自己有用感を味わうことで、組織貢献意欲や人材育成に対する意識の向上を目指す。</li> </ul>